# 毛沢東思想学院の宣伝活動について

## ――ドキュメンタリー映画『夜明けの国』の上映活動を中心に

楊　　韜

Ⅰ　先行研究・目的 …… 325
Ⅱ　重要事項の確認 …… 327
Ⅲ　毛沢東思想学院宣伝隊の概要 …… 330
Ⅳ　宣伝隊による『夜明けの国』上映活動の実態 …… 334
Ⅴ　毛沢東思想学院における宣伝活動の特徴 …… 340
結びに …… 341

## Ⅰ　先行研究・目的

本稿は、かつて大阪を中心として活動続けた毛沢東思想学院の宣伝活動を、学院が立ち上げた宣伝隊に焦点を当て、ドキュメンタリー映画『夜明けの国』の上映活動を通して、その実態と特徴を明らかにするものである。今日となっては、毛沢東思想学院そのものや、映画『夜明けの国』についても、知るものはごく少数だろう。この課題にかかわる重要事項（組織や人名など）について、次節において簡単に紹介するが、ここでは、まずドキュメンタリー映画『夜明けの国』の上映、及び毛沢東思想学院との関わりに関する先行研究（言及）に触れておく。

映画『夜明けの国』が一般公開・上映された1967年秋に、『朝日ジャーナル』は次のように報じている。「この種の記録映画が一本だてで堂々と公開されるというのはまったく異例で、それはそのまま今日の中国の動向にたいする日本人の異常に高い関心を物語っている」[(1)]。この映画は、教育･文化といったジャンルのドキュメンタリー映画製作会社で知られる岩波映画の作品である。実際に、映画の内容から配給トラブルが生じたと元岩波社員の草壁久四郎は回顧している。草壁によると、最終ラッシュ試写の段階で、この映画の配給を引き受けた東和映画からクレームがついた。理由は新生中国の東北の記録というだけ

では興行的にうまくないとの懸念があった。東和映画側は、この映画を見に来る観客は、ほとんどむかしの「満州」を懐かしんでくるわけだから、そうした要素をとり入れなければ興行的に保証しかねるという要望があった[(2)]。

このトラブルは最終的に岩波書店の専務だった小林勇[(3)]の交渉によって円満に解決された。小林は東和の川喜多長政[(4)]社長とは旧知の仲だったため、両者のトップ会談で、一時は不調に終わるかにみえた配給の話もまとまり、予定通り東和映画で配給することになった。配給のトラブルが解決され『夜明けの国』は晴れて、10月28日から東京有楽町の「ニュー東宝」でロードショー公開された。これにつづいて京阪神地区や名古屋地区、そして北海道、九州と全国各地で封切り公開された。映画の評判はすばらしく、作品も高く評価されて、1968年度の毎日映画コンクールで教育文化映画賞を受賞、その後輸出されてアメリカでも公開された。しかし興行的にはヒットという成績には達しなかったので、経済的には岩波映画にとってかなり大きな痛手となったと草壁が述べている[(5)]。

草壁の回顧を読むと、『夜明けの国』は一般公開後、順調に全国各地で上映されたと思われるが、土屋昌明が以下のように異なる見解を示している。すなわち、「『夜明けの国』という映画は、67年10月に公開され、当時の国際事情によって、一週間で上映打ち切りに遭い、その後は自主上映によって観客を増やしたという。」[(6)] 土屋が言う「当時の国際事情」とは、おそらく当時の日中関係、さらに冷戦という大きな国際的政局にあったと思われるが、いずれにせよ複雑な時代背景であったに違いない。当時の情況について、森瑞枝も「ロードショーは一週間で終わったが、自主上映は全国で300回も行われており」と述べている。[(7)]

さきの『朝日ジャーナル』の記事にも、当時日本国内における『夜明けの国』の上映ルートについて、興味深い指摘がある。すなわち、「毛沢東主義はこうして「技術は思想だ」という原則を七億の国民に徹底させようとしている。これらのことは従来も日本に輸入上映された多くの中国映画で語られてきた。が、それはたいてい一般興行ルートからはずされていた。『夜明けの国』は日本映画としてはじめてこの問題にふれ、日本映画であるがゆえに商業ルートを通じて配給され、「中国問題」―それはすでに日本の国内問題である―の所在と実体とをわれわれに知らせてくれる。」[(8)]

『夜明けの国』の自主上映を自ら行った前田年昭は、関西地区での自主上映は主に毛沢東思想学院によるものだったと証言している。「文化大革命の息吹き、その活きた姿を日本の若者に伝えたひとつが映画『夜明けの国』だった。関西では毛沢東思想学院という組織が先導して上映活動が広がった。」[(9)] 筆者が確認したかぎり、この証言は、毛沢東思想学院が映画『夜明けの国』を自主上映した事実に言及した唯一の先行研究（毛沢東思想学院側以

外のものとして）である。

以上を踏まえ、本稿の目的を述べる。本稿の視座として、関西にあった毛沢東思想学院という組織はどのように映画『夜明けの国』の自主上映に関わったのかを検討する。具体的には、まず毛沢東思想学院宣伝隊の設立経緯・組織構造・活動実態をできる限り明らかにする。そのうえで、『夜明けの国』の上映活動を通して、毛沢東思想学院創設者である大塚有章の宣伝思想のルーツ、ならびに毛沢東思想学院における宣伝活動の特徴・傾向を分析する。

さきの関連資料紹介から分かるように、『夜明けの国』についてこれまで一部の言及（先行研究[10]）があるが、最大の欠如は「日本ではどのように受容されたのか」という問題である。本稿で取り上げる毛沢東思想学院宣伝隊による上映活動は、その「受容」の一環であるといえる。ただここでの研究対象は毛沢東思想学院の宣伝活動であり、『夜明けの国』という映画そのものではないことを断っておきたい。なお、本課題の推進に際して、史資料の制限によって、毛沢東思想学院側が公開・出版したものを中心資料として使用した。

## Ⅱ　重要事項の確認

以下、まず関連重要事項（組織や人名など）を確認しておきたい。

### （1）毛沢東思想学院

毛沢東思想学院の前身は、大阪日中友好学院である。日中友好学院は日中友好協会大阪府連合会の事務所の片隅で学習が始まった。当時の様子について、毛沢東思想学院創立15周年の記念誌において次のように記録されている。「1962年4月9日の夕刻、大阪北区繊維問屋街の一角、小さなビルの一室にある日中友好協会大阪府連合会（現大阪府日中友好協会）の事務局のかたすみで、二十余名の青年の学習会がはじまった。正面には赤い布に白い文字で「身体好、学習好、工作好」とかかれ、学習にはげむ青年たちは、机がないために、首に画板をかけている。それが、毛沢東思想学院の前身、大阪日中友好学院がスタートしたときの姿だった」[11]。日中友好協会大阪府連合会の理事長である大塚有章は大阪日中友好学院の運営委員長を務めた。その後、日中友好学院は独立の毛沢東思想学院へと発展した。1968年3月3日、新築となった校舎（宝塚市）で毛沢東思想学院の開校式が行われた。毛沢東思想学院の主な活動は「講習会」を開き、マルクス・レーニン主義や毛沢東思想を学習することであった。1968年から1970年にかけて、日本の新左翼運動とともに、街頭デモや集会などにも積極的に参加し、三里塚闘争にしばしば参加し、援農隊を派遣し

た。1970年以降、日中友好や日中国交回復促進運動は毛沢東思想学院の中心活動となった。日中国交回復以降、毛沢東思想学院が訪中団を派遣するなど、積極的に交流活動を進めた。同時に、日本の労働者問題や天皇制問題などにも取り組んだ。[12] 1991年12月に毛沢東思想学院は解散となった。

### (2) 大塚有章

毛沢東思想学院の創立者は大塚有章である。大塚有章は1897年1月に山口県の岩国に生まれ、早稲田大学政治経済学部を卒業後しばらく満鉄に勤め、のちに大阪で銀行員となった。1928年に銀行員をやめ、社会運動家となったが、のちに大森銀行襲撃事件の関与で逮捕され、10年の懲役に服した。釈放後、事実上国外追放され、中国の東北地区へ渡り、満州映画協会に務めた。1956年に帰国し、1979年9月に死去した。[13]

### (3) 機関紙『学院ニュース』

毛沢東思想学院の機関紙『学院ニュース』は1967年秋に創刊された。その創刊号（1967年10月15日）に大塚有章の「学院ニュース発刊のことば」が掲載されている。そこで、この機関紙の目的が述べられている。すなわち、第一に、人民日報の重要記事を抄訳して速報すること。第二に、日本や中国での毛沢東思想の活学活用の実例を紹介すること。第三に、学院からのお知らせや学友の皆さんの消息などを報道すること、である。通常出版する『学院ニュース』は主に「毛主席のことば」・「時事ニュース」・「お知らせ」・「学習会だより」・「交流の広場」・「広告」といった各欄から構成されている。（【表1】参照）

『学院ニュース』の発行スケジュールは当面半月刊（1日・15日発行）としたが、実際には1968年2月以降月刊とし、1969年以降は毎月1日に発行となった。ただし、事務局員の病気や産休などにより、発行が遅れることもあった。

活字メディアとしての形態は、ガリ版刷りで2頁版から出発し、タイプ印刷（第3号～第8号）を経て活版化、1986年1月の第222号から4頁版となった。最終的には、1991年12月1日の第293号をもって終刊した。そこには、毛沢東思想学院運営委員会による「毛沢東思想学院解散のご報告とお礼」が掲載されている。

『学院ニュース』は通常出版以外、号外や特別付録・増刊号も出していた。たとえば、成田空港建設反対運動に関して、1978年2月20日に三里塚闘争関連の号外を出した。また、特別付録として、1979年9月1日・10月14日・11月17日に河上肇生誕百年記念祭実行委員会会報がつくられていた。ほかにも、1985年4月1日と5月22日、1987年4月1日に中国国際交流協会友好訪日小組歓迎ニュースの特別付録がある。増刊号としては、『ティーチ・

表1　トップ記事の例（1971年）

| 号 | 発行日 | トップ記事の見出し |
|---|---|---|
| 42 | 1月1日 | 毛主席の五・二〇よびかけを学習し実践しよう（井上清） |
| 43 | 2月1日 | 米帝・日本軍国主義を包囲し粉砕する闘争はきびしい実践に裏付けされなければならぬ（大塚有章） |
| 44 | 3月1日 | NHKの反中国策動に集中砲火を浴びせよう |
| 45 | 4月1日 | 三里塚農民を勝利させるために重ねて訴える |
| 46 | 5月1日 | 全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者とそのすべての手先をうち破ろう |
| 47 | 6月1日 | 三里塚決戦を勝利させるために三たび支援を呼びかける |
| 48 | 7月1日 | 中国共産党と毛沢東同志 |
| 49 | 8月1日 | 悲鳴をあげたニクソン・佐藤 |
| 50 | 9月1日 | ドルショックの背景をあばく（中村九一郎） |
| 51 | 10月1日 | 佐藤内閣を打ち倒せ！　日中国交回復！沖縄返還協定粉砕！ |
| 52 | 11月1日 | 人民の総力を結集して佐藤内閣を打ち倒せ！！ |
| 53 | 12月1日 | 議会制民主主義の崩壊とわれわれの闘いの方向 |

出所：『学院ニュース』に基づき、筆者作成。

イン　とびだせ！　80年世代　未来をわれらの手に』（1984年11月1日発行、全82頁、定価400円）；『講演討論集会　いま天皇制を問う』（1985年2月1日発行、全86頁、定価400円）；『天皇在位60年を問う』（1986年4月11日発行、全95頁、定価500円）；『街にビラをはろう　一枚のビラの背後にある闘い』（1987年1月1日発行、全48頁、定価300円）がある。

### （4）映画『夜明けの国』

映画『夜明けの国』の概要について、【表2】に示す。

この映画の内容について、上映パンフレットから一部引用して紹介すると、以下の通りである。「この「夜明けの国」はちょうど文革が始まった月に新中国に入国した岩波映画の撮影隊により、製作された記録映画であり、怒涛の時代を迎えた新中国の姿を伝える唯一の貴重なフィルムである。撮影隊は66年8月から67年2月までに中国の東北地方に滞在し、特

表2　『夜明けの国』の概要

| | |
|---|---|
| 製作会社 | 岩波映画製作所 |
| 配給会社 | 東和株式会社 |
| 製作者 | 高村武次 |
| 企画・脚本 | 吉原順平 |
| 監督 | 時枝俊江 |
| 監督助手 | 阪口康 |
| 録音 | 安田哲男・末村萠律喬 |
| 音楽 | 三善晃 |
| 作品形態 | カラー・1時間50分 |
| 製作時期 | 1967年10月28日 |

出所：『夜明けの国』フィルムに基づき、筆者作成。

に北京、瀋陽、撫順、鞍山、長春、ハルピンを中心に撮影を続けた。（中略）製作の高村武次は「新中国の正しい姿を伝えることにポイントをおき、従来のドキュメンタリーとちがって、同一場所を数回訪れ、生活をほりさげることにより、紀行ではなく滞在記のもつ強さを出そうと考えた」と語っている」[14]。実際に映画のなかで、ハルビン・瀋陽・長春の市街地のほか、「工人村」などの労働者用大規模団地及びそこに附属する幼稚園の日常的な風景が映っている。都市部の生産現場として、瀋陽にある国営大型機械工場や長春にある自動車工場などが取り上げられている。一方農村については、東北各地の「人民公社」の様子を取り上げるほか、「吉林省東遼県農村医療隊」のような農村地域特定の組織に焦点を当て、「農民のために奉仕する」といった農村重要視の一面も映されている。『夜明けの国』の公開後、鑑賞した竹内好は雑誌『世界』に短文を寄せ、映画の内容を紹介し、とりわけ映画のなかで取り上げられた撫順の炭鉱・松花江などについて触れ、次のように述べている。「私はもう二十数年、中国の土を踏んでいない。だから実感は乏しいが、文献などの利用によって、自分の中国像がそう大きくゆがんでいない自信はもっている。この映画を見ても、農村と都市、農業労働と工業労働の格差をちぢめ、交流をはかるという国家計画に応じて民衆生活の上にどういう変化があらわれるかという点については、私の想像力を絶するような突然変異に類するものは何もなかった。というよりも、自分の想像力に自信を強めたし、それによって、私と基本的に人間観をおなじくする制作者に親しみを感じた。」[15] 竹内好の鑑賞後の感想は、おそらく戦前から中国（とりわけ東北地区）の地を踏み、自ら体験してきた多くの日本人に共通している点も多いのではないかと思われる。

## Ⅲ　毛沢東思想学院宣伝隊の概要

### (1) 設立及び初活動

1968年4月13日、学生四人を中心に毛沢東思想学院附属の宣伝隊が結成された[16]。早速、1968年6月30日にはじめての街頭活動を行った。当日、「宣伝隊員と歌舞団員は、目的地に着くなり、毛出席の肖像を高々とかかげて、町の中を巡回した。日共修正主義者の勢力の強いこの地では、暴力による妨害もあろうかというのに、宣伝隊員らは、敢然と毛沢東思想の旗を高くかかげ歌い、踊った。町の人々は、その何ものも恐れない気迫に、非常に興味をよせ、おしみない拍手を送った。」[17]

この日の毛沢東思想学院宣伝隊の初出動は堺市の協和町にある耳原病院付近という場所を選んだことに、実に複雑な背景があった。さきの記事のなかで「日共修正主義者が支配する耳原病院で、日中（正統）会員が入院を拒否されたことにより、協和町では、日共修

正主義者に対する怒りと、病院の民主化を求める声が日増しに高まってきている」との記述がある。耳原病院とは、どういう医療機関であろう。耳原病院は、1953年に設立され、社会医療法人同仁会が運営する総合病院であり、大阪民医連（大阪民主医療機関連合会）の加盟機関でもある。[18] この病院があった場所はもともと耳原町である。耳原町が実は、戦前の全国水平社運動の拠点であり、戦後直ちに部落解放運動にその伝統が受け継がれて、そこから町民自らの手で運営できる身近な診療所を作ろうとの願望が叶って、耳原実費診療所の誕生となり、のちの耳原病院となっているわけだ。故に、部落解放運動の歴史と伝統がそこに織り込まれて設立された経緯がある。[19] そして、耳原病院と日本共産党との関係についてははっきりとされていないが、1970年代の病院関係者が書いた回顧文から次のような事実を見つけた。「こうして、健康を守る会が中心になり、全町民的な超党派組織で「耳原病院（仮称）建設委員会」がつくられた。（中略）以上の15名で委員長は速水逸良氏であった。なお、当時は33年の法人格取得まで、いわゆる人格なき社団であったが、民主運営のため、守る会、解同から役員を送ってもらい理事会をつくり、初代理事長には西岡久一氏がなった。氏は、元共産党の堺市議で、トップ当選をされたことがあり、気安う用事を頼まれる議員さんとして人気のよいかただったが、昨年亡くなられた。」[20] この田中治の回顧文から分かるように、耳原病院の運営側に元日本共産党の堺市議が要職を務めるほど、両者の関係は緊密であった。

一方、どうして毛沢東思想学院は耳原病院との間に対立があったのか。毛沢東思想学院創立20周年記念誌には、「日中友好学院を発展的に改組し、毛沢東思想学院を創立することになった直接の契機は、日本共産党とのあいだにもちあがったたたかいでした」[21] と記述した一節があった。1966年春、宮本顕治書記長を団長とする日本共産党代表団が訪中し、中国共産党代表団との会談が行われたが、ベトナムを支援する国際統一戦線にソ連を加えるかどうかで意見が対立し、そのまま決裂した。代表団が帰国するとすぐさま、日本共産党は中国共産党を非難する論陣をはり、影響下にある大衆団体に対しても介入を開始した。日中友好協会をはじめいくつもの大衆団体が分裂を余儀なくされ、大阪日中友好学院に対しても、党中央の指示のもとに執拗な妨害が続いた。さらに、その後、中国で文化大革命が始まり、文化大革命支持を表明した大塚有章は日本共産党から除名された。この一連の経緯で毛沢東思想学院と耳原病院との間に激しい対立が生じた。したがって、毛沢東思想学院宣伝隊のはじめての活動の実施場所が耳原病院の近くとなったのは、決して偶然ではなかった。

### (2) 組織の拡大

毛沢東思想学院宣伝隊は、活動規模の拡大につれ、隊員募集を始めた。最初の隊員募集が1968年8月に出された。「毛沢東思想学院宣伝隊は、去る七月に耳原病院糾弾の闘争現場に初出動して以後、各職場、地区、デモなど闘争に参加して先鋒隊の役割を果たしつつあります。この実績をふまえて、学院は第二、第三の毛沢東思想宣伝隊を、結成する方針を打ち出しました。志ある諸君は男性女性の別なく奮って応募して下さい。〆切八月三十日」[22]。また第二次隊員募集が翌年の8月に行われた。「宣伝隊の活動を更に多彩なものにして、文芸戦線を強化するため、生気はつらつとした新隊員を募ります。(男性歓迎)　舞踏隊　数名　歌唱隊　多数　連絡先は学院事務局まで」[23]。さらに1970年に入ると、映画巡映を実施するため、映画技師の募集を始めた。「映画班は中国事情の紹介と毛沢東思想の宣伝を任務として大衆の要求があるところ、どこへでも出かけます。この仕事に関心をもつ同志の積極的な参加を期待します。16ミリ映写技術の経験は問いません。初めての人には技術講習をおこないます」[24]。

映画巡映は次第に宣伝隊の中心活動となり、あらたに映画班が組織された。その際、次のような規定が定められていた。「一、日中友好協会（正統）大阪府本部など、各団体グループの要請があればどこへでも派遣する。(但し、映写機及びフィルムだけの貸出はおこなわない)　二、経費に関して　①新フィルム購入積立金として：1500円（この種のフィルム購入費約30万円、撮影限界回数約200回、フィルムが使えなくなった時の新フィルム購入のために積立）　②映写機運搬費と映写技師（二名分）の交通費：実費　③映写技師（二名分）の食費：400円（一食200円）その他具体的な問題についてはよく相談し、なるべく経費が少なくてすむ様にする」[25]。宣伝隊の活動は軌道に乗り、さらなる規模拡大を図るため、1971年5月に宣伝隊大阪支所を大阪市北区中崎町10の日刊ビルに開設した。[26]映画班の上映活動は、宣伝隊の活動の一環として看做されるなら、映画班を宣伝隊の下部組織として位置付けできると考える。

### (3) 宣伝隊の主要活動形態

毛沢東思想学院宣伝隊の活動は、毛沢東思想（理論）の紹介･普及を基本としているが、中国情報の発信とともに、日本社会の様々な問題も提起し、それに関する議論を呼びかけている。これらを実現するため、歌唱、舞踊（腰鼓公演なども含め）、映画上映、中国物産移動即売、宣伝カー出動、ビラ撒きなど、多種多様な形態で活動を展開していた。たとえば、宣伝隊によって上映（巡映）した映画の一部を覗いてみよう。(【表3】参照)

表3から分かるように、三里塚闘争（成田闘争）に関する作品が頻繁に上映されていた。

表3　宣伝隊による主な上映映画一覧（1969 ～ 1974）

| 映画タイトル | 製作 | 宣伝隊による上映時期 | 上映地 | 出所 |
|---|---|---|---|---|
| 『日本解放戦線三里塚の夏』 | 小川プロダクション | 1969年4月19日 | 日中（正統）宝塚支部 | 『学院ニュース』第22号 |
| 『夜明けの国』 | 岩波映画製作所 | 1970年11月～1971年11月＊ | 後述 | |
| 『智取威虎山』 | 学院訪中学習団宛ての贈呈品 | | | 『学院ニュース』第55・56・63・65・74号 |
| 『アメリカ侵略者はベトナムからでていけ』 | 不明 | | | |
| 『三里塚　木の根部落の闘い』 | 不明 | | | 『学院ニュース』第83号 |
| 『三里塚　第二砦の人々』 | 小川プロダクション | | | 『学院ニュース』第83号 |
| 『人民解放軍―中国1972年夏』 | 名古屋放送 | | | 『学院ニュース』第67・71・74号・1973年9月1日号外 |
| 『紅旗用水路』 | 不明 | | | 『学院ニュース』第75号 |
| 『中国の針刺麻酔』 | 不明 | | | 『学院ニュース』第77号 |

出所：『学院ニュース』に基づき、筆者作成
＊『夜明けの国』が毛沢東思想宣伝隊によって集中的に上映されたのは1970年に入ってからのことだが、『学院ニュース』第22号に「五・四運動50周年記念　安保粉砕　日中友好　労学市民連帯大阪集会」という開催広告が掲載されており、そのプログラムには井上清京都大学教授による特別講演と映画『夜明けの国』の二つが組み込まれている。従って、『夜明けの国』の関西における初上映はこの大阪集会が行われた1969年4月19日の可能性がある。この集会の主催は「日中友好協会（正統）大阪本部」となっているが、日中友好協会（正統）と毛沢東思想学院のこれまでの連携から考えると、当日の『夜明けの国』上映は毛沢東思想学院宣伝隊によって実施されたと思われる。

これは、さまざまな要因があると考えられるが、少なくとも以下の二点が挙げられると思われる。第一に、毛沢東の革命思想との関連である。実に、当時の三里塚闘争において、毛沢東の革命思想を精神的武器として用いた人もいる。たとえば、「やがて、三里塚闘争の前面には佐山さんが配った毛沢東帽をかぶり、毛沢東バッジを胸にした反対派の農民たちが数多く出てきた」[27] のようなエピソードが見られる。第二に、大塚有章の自身の経歴との関連である。前述したように、大塚有章は、旧満州（中国の東北地区）に幾度も滞在し、戦後引き揚げられ日本に帰国した。日本政府は、三里塚から芝山町にかけての地域で成田空港を建設する計画だった。この地域もまた開拓農民、とりわけ満蒙開拓団の引揚者の多い地域であった。同じ引揚者として、三里塚反対派農民たちとの連帯感も大塚有章が反対派支援活動に力を入れた理由の一つではないかと思われる。

## Ⅳ　宣伝隊による『夜明けの国』上映活動の実態

### (1) 一般上映

映画班が設立されて以降、基本的には各地域の各団体やグループの要請があれば出かけて行くこととなり、岩波映画『夜明けの国』もこのように上映され、上映にあわせて解説や質疑懇談会も行われた。[28] 毛沢東思想学院側は各界からの要望を受け、上映のスケジュールを決める際、「「学院ニュース」前号でよびかけて以来、多数の申込みが寄せられていますが、今年末までを第一期として具体的スケジュールをたてますので、希望される方は早めに学院事務局までお申込み下さい」と通知している。[29]

1970年10月、毛沢東思想学院創立三周年にあわせ様々な記念行事が行われた。【図1】が示すとおり、日中青年交歓会や写真展などのほか、映画会もあった。この三周年記念行事の一つとして、『夜明けの国』が上映され、監督である時枝俊江による講演会も開催された。当時の様子は、『学院ニュース』に次のように記録されている。

> 学院祭第二回目の行事である「夜明けの国」講演と映画の会は11月3日、大阪府農林会館講堂いっぱい400名にのぼる参加者をえて盛会のうちにおこなわれた。とくに青年層の多いのが目をひいた。「夜明けの国」の演出者・時枝俊江女史の一時間にわたる記念講演は、プロレタリア文化大革命の実態を外国のただ一つの映画班として克明にとらえるために、こまかく努力された数々の実践を語り、聴衆に深い感銘を与えた。そのあと、「夜明けの国」の上映に移った。（中略）観衆の大部分はアンケートなどを通じ「非常によかった」と賞賛した[30]。

毛沢東思想学院創立三周年記念
学院祭
◇記念式典と日中青年交歓会
十月二十五日(日) 午後一～五時
第一部　毛沢東思想学院（阪急宝塚線「山本」）
第二部　中山寺グラウンド（阪急宝塚線「中山」）
第一部　記念式典
学院長挨拶、来賓祝辞、学院活動報告と今後の方針
第二部　日中青年交歓会
革命的、独創的なスポーツ、合唱などの交歓
中国船乗組員同志を招待（交渉中）
写真展「中国社会主義工農業建設の成果を示す写真展示」
◇映画会
十一月三日(火＝祭日) 午後六～九時
大阪府農林会館（地下鉄「谷町四丁目」）
・映画「夜明けの国」
岩波映画撮影隊が文化大革命のはじまった一九六六年八月から六カ月中国に滞在して製作した記録映画。カラー二時間。
毎日映画コンクール・教育文化映画賞受賞
・記念講演　時枝俊江女史（岩波映画女流監督「夜明けの国」演出）
◇講演会
十一月七日(土) 午後六～九時
大阪府社会福祉会館（地下鉄「谷町六丁目」）
・挨拶　大塚有章学院長
・講演「日本軍国主義の復活とわれわれの任務」　井上清先生　岡田春夫先生
・闘争報告
日本原（岡山県の基地）闘争
出入国管理体制粉砕闘争
日中友好運動の発展のために（アピール）
いずれも入場無料で、みなさんのおいでを歓迎します。
いずれも時間どおり始めますので、御協力をお願いします。
毛沢東思想学院創立三周年記念
学院祭実行委員会

図1
出所：『学院ニュース』第40号、1970年11月1日

時枝俊江監督は『夜明けの国』の製作当事者であり、撮影のため自ら中国を訪れ、身をもって新中国を体験したものとして、彼女の講演は来場者に深い感銘を与えたことは違いない。しかし、頻繁に映画製作関係者に来てもらって語ることができない。その後の上映会には、大塚有章が自ら解説者として加わった。実際に大塚有章と一緒に巡映に参加した元学院関係者は往年のエピソードを次のように披露した。

> たしか大学二年生の頃だから十年ばかり前のことになるが、大塚先生の二泊三日の旅行にお伴にしたことがある。広島県の三原と岡山とで集会の計画があり、どちらも中国を紹介する映画「夜明けの国」を上映したあと大塚先生が話をされるという次第で、映画上映が私の役目であった[31]。

1970年からの二年間にわたり『夜明けの国』の巡映は二百回に及んだが、それには必ず大塚有章が付き添い、中国の実情を紹介し、日中両国の友好を訴えた。[32]

### (2) 巡回上映へ

1970年秋から、『夜明けの国』の巡回上映が始まった。第一回は1970年11月15日大阪西成地区で、参加者は約60名だった。その直後の巡回上映は、大阪及びその周辺地域の大学を会場として順次行われた。11月18日は13時から神戸市外国語大学学生会館で、11月22日は13時から大阪外国語大学C1教室で、11月26日は13時から桃山学院大学C館1階会議室でそれぞれ上映された。11月28日は15時からと17時30分からの二回の上映が、同志社大学学生会館ホールで行われた。大学以外では、11月29日は17時から伊丹市文化会館で上映された。[33] これらの巡回上映が、毛沢東思想学院の知名度の向上にもつながったようだ。「映画会でははじめて毛沢東思想の奥深さと学院の存在を知って入学を決意したという人が十名ちかくも現れた。」[34] 若者への毛沢東思想宣伝普及を目指している学院側にとっては予想外の収穫だっただろう。『夜明けの国』の上映後、その場で質疑懇談会を開き、鑑賞後の感想を述べ合い、議論を深めることも巡回上映の特徴である（【図2】）。

1971年以降、上映エリアが拡大され、関西近隣の中国地方への巡映も始まった。たとえば、和歌山県冨田、兵庫県明石市、兵庫県立川、岡山県岡山市、広島県三原市、などでも巡映が行われた。[35] 1971年4月以降、関西から遠く離れた九州での上映活動も始まった。4月25日から28日にかけて、福岡市・中間市・田川市で巡映が行われた。[36]

巡映エリアの拡大のなか、当時まだアメリカ統治下であった沖縄からも上映要請が舞い込んだ。要望を出したのは、中根正子と名乗った琉球大学の学生だった。この要望に対し

図２
出所：『学院ニュース』第47号、1971年6月1日

て、毛沢東思想学院側は「日中正統沖縄県本部と連絡し、具体化を検討中です」[37] と実現へ積極的な姿勢を示したが、実現できたかについては不明である。

### (3) 上映後の反響

『夜明けの国』が各地で上映され、上映後の懇談会などを通して、鑑賞した人々の意見交換も行われ、また映画を通して最新の中国事情を多くの人々に紹介することができた。[38] 森瑞枝も「公開当時、日本人の中国への関心を呼び覚まし、当時の青年層に一定の影響を及ぼした」[39] と当時の情況を証言している。毛沢東思想学院側によると、おおむね評価され、とりわけ大企業の青年労働者たちに歓迎された（【図3】）。また、『学院ニュース』の紙面においても、鑑賞した人からの投書が寄せられている。たとえば、遠山寿夫（職業は機関専従）という方からは「非常の明るさをたたえた中国東北地方の農民の顔と日本帝国主義の乱掘による露天掘の中の廃墟の対象でした。（中略）労働者と農民が堅く結び付けられているのは、あれやこれやの理論ではなく、このような具体的な相互援助から出発しているからだと思う」[40] と感心する声が寄せられている。

また、山田昇（職業は防衛庁官吏）という方からは「①毛主席を中心にして国民が国をよくしようと一生懸命に努力している点がさまざまにみられる。②中国の国力は日本、西洋にはおくれている。しかし国民はよく理解し、業務に改善などの努力は立派である。日本人（青年）はみならわねばならない。③国が広いから日本人のようにがちゃがちゃしてはいない。のどかである。」という感心した点が述べられ、さらに「①五―七歳等の教育（親と離れた生活はよい）集団生活が大変厳しいように思える。②「紅衛兵」は毛主席の

「夜明けの国」

—大企業の青年労働者が大歓迎—

「夜明けの国」の上映活動は学院宣伝隊が扱ったものだけでも五十数回におよんでいるが、しかし多くは大学、高校、一般市民団体との共催が主であった。この前例を破って今月大阪府下の都市で、大労組の青年活動家と日中友協（正統）の地域活動家たちの共催で映画会が開かれた。

学院事務局は総出で参加したが、青年労働者を主とした会場いっぱいの観衆は熱心に中国人民の真剣な国造り人づくりの光景に見入っていた。

上映後の懇談会では「プロ文革によって批判された人々は現在どうしているのか」「ニクソンという帝国主義の頭領の訪問をなぜ中国は拒否しないのか」といった政治的な質問が提出され、会場は終始熱心な真面目な空気に満ちあふれていた。

映画「夜明けの国」大企業労働者を対象に上映。

図3

出所：『学院ニュース』第49号、1971年8月1日

PRにみえる。又その行動は日本の明治維新を想像する。③中国は人口が大変多い。もし「争い」が起これば大変である。」[41] と疑問点も提示された。

### （4）上映活動の全体像

1970年秋から始まった『夜明けの国』の上映活動は、おおよそ二年間にわたり続けられた。最初の一年間には、上映回数が70回、参加者が4000人に上った。一年目の主な巡映地域は大阪・京都・兵庫・和歌山・広島・福岡・群馬の各地であった。[42] 1972年に入って、映画班の上映作品は『夜明けの国』から次第に『智取威虎山』へ切り替わるようになった[43]が、その後も『夜明けの国』の上映が完全になくなったわけではない。【図4】が示すように、1972年5月27日に毛沢東思想学院宣伝隊・日中友好協会（正統）豊中支部・大阪大学現代中国研究会の三団体による共同開催で「現代中国を知る映画の会」は豊中市民会館で開催された。[44] 当日、『夜明けの国』が上映され、その後質疑応答・討論が行われ、約60名の市民が参加した。その後の7月22日には、堺市の身体障害者センターでも『夜明けの国』の上映会が行われた。[45]

1972年8月3日から9月7日までの一ヶ月の間に、毛沢東思想学院による連続公開講座が

集会に合流し、全体集会の後「自衛隊派兵阻止、基地撤去、土地強奪反対」の独自集会を行った。平日昼間のため参加したのは約六十名であっ

# 豊中で映画・討論会

## 三団体共催で「夜明けの国」

宣伝隊

盛況だった豊中での映画会

毛沢東思想学院宣伝隊、日中友好協会（正統）豊中支部、大阪大学現代中国研究会の主催で五月二十七日「現代中国を知る映画の会」を豊中市民会館会議室で催した。現代中国と毛沢東思想を労働者はじめ広範な人民に紹介、宣伝するため「夜明けの国」を上映、そのあと質疑応答、討論を行い、約六十名の労働者、市民、学生が参加した。

約一週間前から豊中市内の阪急沿線にステッカーを貼り駅頭ビラ配りの宣伝を三団体協力して行い、また宣伝カーを使って呼びかけた。

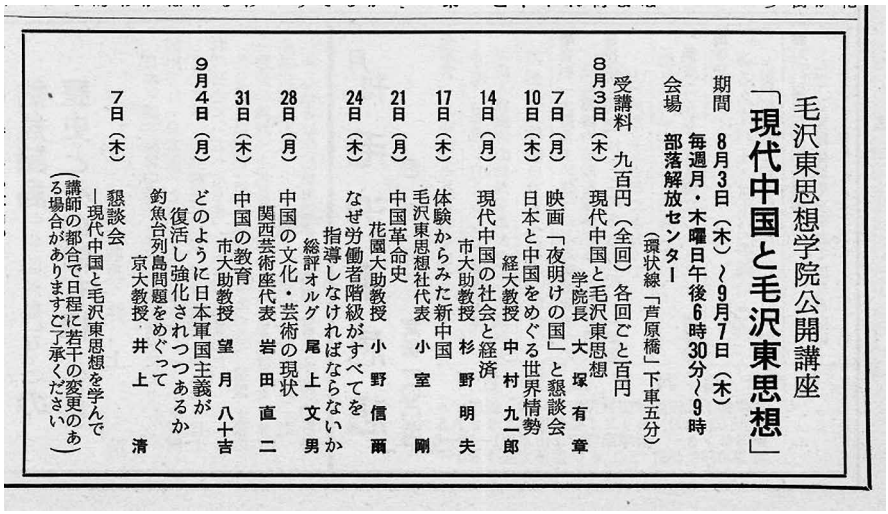
当日は、定刻六時半には大半の座席が参加者によって埋められ、ただちに上映が開始された。社会主義建設を力強くおしすすめる中国人民の姿に参加者はみな引き込まれていく。

上映後の討論では、「学校教育、マスコミの宣伝による中国に対する偏見がこの映画

図4

出所：『学院ニュース』第59号、1972年6月1日

大阪市の部落解放センターで実施された。合計11回の公開講座には、各界の専門家が講師を務め、中国の経済・社会・文化に関する講義が提供された。この夏の公開講座プログラムにも『夜明けの国』の上映会と懇談会が組み込まれた（【図5】）。同じような公開講座は、1972年から1973年にかけて複数回開催され、『学院ニュース』に掲載されている受講者募集広告[46]から、毎回の公開講座には必ず映画『夜明けの国』の上映会と懇談会がセッティングされていた。公開講座の講義のほとんどは著名知識人による講演であり、一部の訪中経験者による体験談もあるが、中国の情報を手に入れることが容易ではない当時において、やはり映像によって与えられるインパクトが一番大きいだと考える。ゆえに映画『夜明けの国』の上映会と懇談会は公開講座の目玉「科目」であり、一連の公開講座をバラエティーに富んだ（一般市民を対象とする）一大イベントをする意味をもつ。無論同時に学院側からみれば、受講者を集まる「セールス・ポイント」とも言えよう。



毛沢東思想学院公開講座

「現代中国と毛沢東思想」

期間　8月3日（木）～9月7日（木）
毎週月・木曜日午後6時30分～9時
会場　部落解放センター
（環状線「芦原橋」下車五分）
受講料　九百円（全回）各回ごと百円

8月3日（木）　現代中国と毛沢東思想　学院長　大塚有章
7日（月）　映画「夜明けの国」と懇談会
10日（木）　日本と中国をめぐる世界情勢　経大教授　中村九一郎
14日（月）　現代中国の社会と経済　市大助教授　杉野明夫
17日（木）　体験からみた新中国　毛沢東思想社代表　小室剛
21日（月）　中国革命史　花園大助教授　小野信爾
24日（木）　なぜ労働者階級がすべてを指導しなければならないか　総評オルグ　尾上文男
28日（月）　中国の文化・芸術の現状　関西芸術座代表　岩田直二
31日（木）　中国の教育　市大助教授　望月八十吉
9月4日（月）　どのように日本軍国主義が復活し強化されつつあるか　釣魚台列島問題をめぐって　京大教授　井上清
7日（木）　懇談会　―現代中国と毛沢東思想を学んで
（講師の都合で日程に若干の変更のある場合がありますご了承ください）

図5

出所：『学院ニュース』第61号、1972年8月1日

大塚有章は、自らの中国滞在経験から中国との直接交流を非常に重視している。大塚が主宰する毛沢東思想学院の創立後まもなくから訪中団の派遣が始まり、1980年代まで10回以上中国へ訪問団を送った。各回の訪中に先立て訓練班を作り事前研修に励んだ。事前研修には、中国に関する歴史や現状、及び毛沢東思想理論を学習するほか、中国語会話の授業も設けられていた。『夜明けの国』は、中国の現状を知る素材として、1972年10月の訪中訓練班にも使われた（【図6】）。訪中訓練班はその後「訪中準備学習会」と改められ、継続的に開催された。1975年7月～9月、1977年8月～10月、1978年7月～9月の各回の「訪中準備学習会スケジュール」[47] には、いずれも『夜明けの国』・『中国人民解放軍』・『紅旗用水路』の三つの映画の上映が組み込まれている。これらの映像資料は、訪中団員たちの事前研修において、一種の予備知識として重宝されたことが伺える。

二年間にわたり続けられた『夜明けの国』上映活動について、毛沢東思想学院側は統計をとり、次のように発表した。「『夜明けの国』のフィルムを入手し、西日本各地の職場、学園、地域で上映。上映後懇談会をもち、中国事情の紹介と毛沢東思想の宣伝をおこなった。二年間に200回上映、参加者は15000名以上。」[48] この統計数字は、筆者の調べた限り現段階までに確認できた唯一のものである。

訪中訓練班を開始

十月から政治理論学習も

9月23日（土）第2次訪中学習のための訓練班が結成され、待場裕子先生の指導で中国語会話の学習をおこなった。

第二次訪中学習代表団派遣をめざす訓練班は、二十数名の訪中希望者が参加して、九月二十三日から開始された。

訓練班の結成にあたって、大塚学院長はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を立派に活学活用できる活動家に自らを鍛えるための訪中が、より成果をあげるよう厳しく真剣に準備学習に励んでほしいと訴えた。

つづいて待場裕子先生による中国語会話の学習に移り、訪中準備学習の第一歩をふみだした。なお、訓練班参加者の個別面接は二十六日、二十七日におこなわれた。

十月のスケジュール

（一）政治・理論学習

5日（木）われわれの訪中の意義　井上　清

7日（土）8日（日）中国革命の歴史　小野　信爾

12日（木）毛沢東思想の根幹〝大衆路線〟　大塚　有章

19日（木）情勢の特徴点と日本人民の課題　小室　剛

22日（土）21日（日）映画「夜明けの国」と質疑討論

26日（木）歴史の転換にあたっての日本と中国の当面の展望　中村九一郎

（二）中国語会話の学習　待場　裕子

（毎木曜日は午後7…00～9…00　土～日曜日は午後9…00～翌正午）

7日（土）～8日（日）

15日（土）21日（日）

28日（土）～22日（日）

（土曜日は午後7…0000～9…0000　日曜日は午後1…0000～3…0000）

図6

出所：『学院ニュース』第63号、1972年10月1日

## V　毛沢東思想学院における宣伝活動の特徴

### (1) 大塚有章の宣伝思想のルーツを探る

毛沢東思想学院の創立者である大塚有章は、学院の運営においてつねに宣伝活動を重要視した。大塚有章は、人民日報社説の事例（1929年12月の古田会議における決議案）を引用して、「ゆえに紅軍の宣伝工作は、紅軍の最も大きな工作である。当時の大衆に対する宣伝活動の主な組織形態は宣伝隊であった」[49] と宣伝の重要性を謳う。また、映画の上映活動を重視するのは、大塚有章がかつて満映巡映課長を務めた経歴にも関係すると思われる。大塚有章は回顧録のなかで次のような経験を述べている。「それから私の巡映課勉強が始

まった。何事に対しても、やるほどなら徹底的に突込んでみたいというのが、私の流儀です。（中略）それに映画館のない街、電燈もない部落の人々に映画を見せてという仕事にも、私なりの夢が持てそうな気がして、久し振りに背筋がピンと引きしまるのを感じるのでした」[50] 大塚有章は、満映勤務時代から、巡映に取り組み、巡映における困難や解決法を熟知していた。毛沢東思想学院宣伝隊の巡映活動においても、彼の満映時代の経験が存分に活用されたと考えられる。

### （2）『夜明けの国』上映活動の特徴

岩波映画『夜明けの国』の上映活動は、1970年代初頭の毛沢東思想学院宣伝隊の中心的な活動となり、学院の理念の宣伝や中国に関する情報の伝達及び日本人の新中国認識にも大きな役割を果たしたと言える。そこには、いくつかの特徴が見られる。

第一に、映画上映が内部と外部の双方において活用されたことである。すでに述べてきたように、毛沢東思想学院の内部において、学院祭や訪中訓練班などで『夜明けの国』を上映し、いわゆる学習材料の一種として用いられた。一方、外部においては、公開講座や巡映などに使用されていた。

第二に、映画上映地域は学院の所在地である大阪を中心としながらも西日本のかなり広範囲までに広げられたことである。さきに挙げられたように、上映会実施の主なエリアは大阪・神戸・京都だが、近隣の岡山県や広島県でも頻繁に行われた。一方、遠方では福岡県まで巡映を行ったが、関東圏や北日本地域への広がりはなかった。

第三に、映画上映地の選択について、主に毛沢東思想学院関係者（たとえば各大学の教職員や友好団体の方など）のネットワークによるものではないかと推測する。福岡県のケースでは、日中友好協会（正統）福岡支部の要請を受けたものだが、中間市や田川市が鉱工業で栄えた町であり、現地の労働運動との関連もあったのではないかと思われる。

## 結びに

以上述べてきたとおり、毛沢東思想学院宣伝隊による映画『夜明けの国』の上映活動の一部詳細がわかったが、「二年間に200回上映、参加者は15000名以上」という学院側の統計データを確実に裏付けることができなかった。しかしながら、映画『夜明けの国』の上映活動は1970年前後における毛沢東思想学院宣伝隊の最重要活動（学院の知名度アップの目玉イベントともいえる）として位置付けることが可能であり、それを通じ学院の宣伝活動の状況を一定程度に明らかにできた。最後に、この課題を取り組むなかで残された問題

点についても整理しておきたい。

当時の日本国内（とりわけ関西地区）において、『夜明けの国』に対する反響（報道･評価など）がどのようなものなのかについて、本稿では『学院ニュース』をはじめ毛沢東思想学院側の公開資料を利用して考察した。しかし、当事者の毛沢東思想学院側の資料のみでは限界があると認めざるを得ない。映画鑑賞後の反響について、『学院ニュース』に寄せられた投書を事例として紹介したが、選別され掲載された投書と異なる意見も当然存在するはずだ。たとえば、投書になかで言及されたシーンとして、冬の間にトラクターの修理を行うシーンや幼稚園の風景などといったいわゆる「光」の部分があったが、当時の中国における「影」の部分に関する言及がみられない。また、『夜明けの国』では、文革の暴力性についてまったく触れていないことや中国側管理の下で取材・撮影された、といった事情もある。これらについて、毛沢東思想学院の学員たちや外部の一般観衆がどのように感じていたのかは不明のままである。

また、毛沢東思想学院宣伝隊の活動ジャンル（形態）は文革中の（各地に現れた）文芸形態、たとえば「忠字舞」や「大字報」などとの関連や、あるいはその異同にも注目する必要があろう。

丸川哲史は「『夜明けの国』は、私たち日本人の戦後の歩みをそこに投影しながら見るべきメディアとして、私たちに不断なる問いかけを放つ潜勢力を持ち続けているもの、と私は評価したい」[(51)] と述べているように、かりに『夜明けの国』の受容を戦後日本人の思想情況を探るルーツの一つとして用いるなら、毛沢東思想学院の位置づけも検討すべきである。はたして毛沢東思想学院は当時の日本において、個別あるいは特殊な存在だったのか。関西地区以外にも類似の組織が存在したのか。あったとしたら、それらを比較する余地も残されているだろう。

## 註

(1)「『夜明けの国』の一般上映」『朝日ジャーナル』1967年11月26日号（朝日新聞社、1967）。

(2) 草壁久四郎『映像をつくる人と企業：岩波映画の30年』（みずうみ書房、1980）148頁。

(3) 小林勇は、岩波書店創業者岩波茂雄の女婿であり、岩波文庫の創刊に携わり、のちに岩波書店の会長となった。谷川徹三・井上靖編『回想小林勇』（筑摩書房、1983）を参照されたい。

(4) 川喜多長政は映画製作者や映画輸入業者として知られ、東和商事（現在の東宝東和）の創業者である。清水晶『上海租界映画私史』（新潮社、1995）、及び辻久一著・清水晶校注『愛蔵版　中華電影史話』（凱風社、2016）を参照されたい。

(5) 草壁久四郎『映像をつくる人と企業：岩波映画の30年』（みずうみ書房、1980）149頁。

(6) 土屋昌明「はしがき」土屋昌明編『目撃！文化大革命：映画『夜明けの国』を読み解く』（太田出版、2008）6頁。
(7) 森瑞枝「映画『夜明けの国』をめぐる討論について」『専修大学社会科学研究所月報』第539号（専修大学社会科学研究所、2008）。
(8)「『夜明けの国』の一般上映」『朝日ジャーナル』1967年11月26日号（朝日新聞社、1967）。
(9) 前田年昭「教育革命いまだ成らず」土屋昌明編『目撃！文化大革命：映画『夜明けの国』を読み解く』（太田出版、2008）168頁。
(10) ほかの関連研究として、以下のものが挙げられる。飯田心美「広範囲に描いた中共の新しい姿　夜明けの国」『キネマ旬報』第1267号（キネマ旬報社、1967）；竹内実「「文革」下の中国民衆　『夜明けの国』」『文芸』第7巻第1号（河出書房新社、1968）；竹西寛子「「夜明けの国」を観る」『ユリイカ』第33巻第3号（青土社、2001）；時枝俊枝「映画「夜明けの国」の制作から：日中両国人民の相互理解を焦点に」『アジア経済旬報』第714号（中国研究所、1968）；丸川哲史「形式と歴史の間で：『夜明けの国』と『蟻の兵隊』の余白」『季刊軍縮地球市民』第7号（明治大学軍縮平和研究所、2007）；「日本のドキュメンタリー作家インタビュー　No. 19　時枝俊江」山形国際ドキュメンタリー映画祭 HP http://www.yidff.jp/docbox/21/box21-1-1.html（2019年5月12日最終確認）。
(11) 毛沢東思想学院事務局編『星星之火　毛沢東思想学院創立15周年記念誌』（毛沢東思想学院、1982）91頁。
(12) 毛沢東思想学院の設立経緯や各年の活動については、毛沢東思想学院事務局編『星星之火　毛沢東思想学院創立20周年・創立者大塚有章生誕90周年記念誌』（毛沢東思想学院、1988）を参照されたい。
(13) 大塚有章の経歴については、大塚有章『未完の旅路』（三一書房、1976）を参照されたい。
(14) 土屋昌明編『目撃！文化大革命：映画『夜明けの国』を読み解く』（太田出版、2008）201–202頁。
(15) 竹内好「夜明けの国」『竹内好全集　第四巻』（筑摩書房、1980）〔初出：『世界』第264号（岩波書店、1967）〕。
(16)「宣伝隊一年間の総括」『学院ニュース』第21号、1969年4月1日。
(17)「毛沢東思想学院宣伝隊　敢然と実践にのり出す」『学院ニュース』第13号、1968年7月15日。
(18) 耳原病院総合 HP http://www.mimihara.or.jp/sogo/hospital/history/（2019年5月12日最終確認）。
(19) 長田平「いのちとくらしを守って　耳原病院とともに三十八年有余〈その一〉」『部落』第565号（部落問題研究所、1993）50頁。
(20) 田中治「3年9ヶ月プラス20年（その1）」『耳原病院医報』第5号（耳原総合病院、1974）10頁。
(21) 毛沢東思想学院事務局編『星星之火　毛沢東思想学院創立20周年・創立者大塚有章生誕90周年記念誌』（毛沢東思想学院、1988）133頁。
(22)「毛沢東思想学院宣伝隊員募集」『学院ニュース』第14号、1968年8月15日。
(23)「毛沢東思想学院宣伝隊（第二次）募集！」『学院ニュース』第25号、1969年8月1日。
(24)「毛沢東思想学院宣伝隊・映画班（映写技師）募集！」『学院ニュース』第39号、1970年10月1日。

(25)「毛沢東思想学院宣伝隊・映画班派遣に関する規定」『学院ニュース』第39号、1970年10月1日。
(26)「毛沢東思想宣伝隊大阪支所開設のお知らせ」『学院ニュース』第46号、1971年5月1日。
(27) 宇沢弘文『「成田」とは何か：戦後日本の悲劇』（岩波書店、1992）146頁。なお、三里塚闘争についてここでは深入りしないが、朝日ジャーナル編集部編『闘う三里塚：執念から闘志への記録』（三一書房、1971）も参照されたい。
(28)「毛沢東思想学院宣伝隊・映画班派遣についての呼びかけ」『学院ニュース』第39号、1970年10月1日。
(29)「毛沢東思想学院宣伝隊・映画班派遣について―「夜明けの国」上映―」『学院ニュース』第40号、1970年11月1日。
(30)「「夜明けの国」　講演と映画の会」『学院ニュース』第41号、1970年12月1日。
(31)「忘れえぬ思い出」『学院ニュース』第158号、1980年9月1日。
(32) 毛沢東思想学院事務局編『星星之火　毛沢東思想学院創立20周年・創立者大塚有章生誕90周年記念誌』（毛沢東思想学院、1988）、139頁。
(33)「映画「夜明けの国」巡回上映」『学院ニュース』第41号、1970年12月1日。
(34)「映画班　大活躍」『学院ニュース』第42号、1971年1月1日。
(35)「毛沢東思想宣伝隊・映画班の旗は広く深く人民大衆の中へもちこまれている」『学院ニュース』第43号、1971年2月1日。「毛沢東思想宣伝隊・映画班の旗はさらに広く深く人民大衆の中へ進出している」『学院ニュース』第45号、1971年4月1日。「「夜明けの国」―東奔西走を続ける―」『学院ニュース』第46号、1971年5月1日。
(36)「「夜明けの国」　福岡県下巡映」『学院ニュース』第47号、1971年6月1日。
(37)「沖縄からも「夜明けの国」上映を要請」『学院ニュース』第47号、1971年6月1日。
(38)「各地で連続して映画会　『夜明けの国』新中国を紹介」『学院ニュース』第51号、1971年10月1日。
(39) 森瑞枝「映画『夜明けの国』をめぐる討論について」『専修大学社会科学研究所月報』第539号（専修大学社会科学研究所、2008）。
(40)『学院ニュース』第43号、1971年2月1日。
(41)『学院ニュース』第44号、1971年3月1日。
(42)「一年間の活動報告　夜明けの国　各地で上映」『学院ニュース』第52号、1971年11月1日。「「人間中心の社会に感動」　闘っている人ほどふかく理解」『学院ニュース』第53号、1971年12月1日。
(43)「「智取威虎山」を大衆の中へ　宣伝隊に積極的参加を！」『学院ニュース』第55号、1972年2月1日。
(44)「豊中で映画・討論会　三団体共催で「夜明けの国」」『学院ニュース』第59号、1972年6月1日。
(45)「「夜明けの国」を上映　堺・身体障害者センターで」『学院ニュース』第61号、1972年8月1日。
(46) それぞれ『学院ニュース』第55号（1972年2月1日）、第60号（1972年7月1日）、第61号（1972年8月1日）、第67号（1973年2月1日）、第68号（1973年3月1日）参照。
(47) それぞれ『学院ニュース』第96号（1975年7月1日）、第121号（1977年8月1日）、第132号（1978年7月1日）参照。

(48)「毛沢東思想学院の活動略年表」『星星之火　毛沢東思想学院創立20周年・創立者大塚有章生誕90周年記念誌』(毛沢東思想学院、1988) 158頁。
(49) 大塚有章「宣伝隊員よ　頑張れ！」『学院ニュース』第25号、1969年8月1日。
(50) 大塚有章『未完の旅路』第五巻、53–54頁。
(51) 丸川哲史「形式と歴史の間で：『夜明けの国』と『蟻の兵隊』の余白」『季刊軍縮地球市民』第7号（明治大学軍縮平和研究所、2007）119頁。